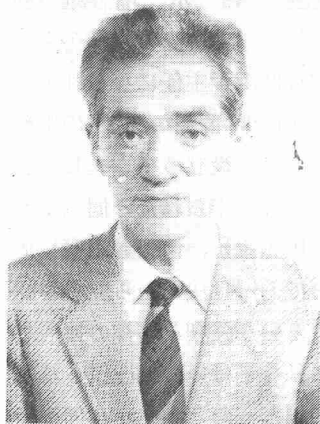


## すこしユニークな履歴書

増田 彰 正 (化学教室)



昭和24年7月に新制東京大学の学生として入学した。敗戦後まだ4年目の当時、ひもじい駒場寮での生活だった。進学志望学科では大いに迷ったが、最終的に化学にした。昭和26年4月から本郷での学生生活が始まる。友人達の多くは化学実験を大いに楽しんでいたが、私はなじめず、“実験下手コンプレックス”に悩んだ。これは、ひそかに不安に思っていたことであった。文学部心理学科などへの転部・転科も心の中をよぎったが、当時の私にとっては、ぜいたく過ぎる考えであった。

就職がうまく行かなかった4年次の晩秋のある日、南英一先生に呼ばれた。先生は、「名古屋大学理学部に最近、地球科学科という新しい構想の学科ができたが、その学科に地球化学の研究室がある。地球化学の講座は、日本ではこれが唯一である。」と、言われ、私に名古屋行きを強く勧められた。しかし、私は、地球化学にほとんど関心がなかったので、数日後にその旨を伝えた。(その時の南先生の部屋は、私の現在の部屋くらいに雑然としていて、いろいろなものがあちこちにあって、ほとんど腰を下す空間もなかった。) その時、南先生がどのような表情をなされたか記憶していないが、暫くして、前言を撤回し、再考したいと

申し出た。

名古屋大学の大学院で地球化学を専攻することになったが、研究意欲は前にもまして燃えなかった。しかし、次の二つの仕事をまとめている間だけは非常に燃えた。その一つは、希土類元素の存在度比の変化と原子番号との間の規則性に関するもの。もう一つは、地球の原始時代の鉛の同位体組成の推定、であった。これは、共に、紙と鉛筆と手回し計算機によるものである。両研究は、非常に優れた仕事であると今も自負できるが、自前のデータによるものではないため、実験を重視する伝統を持つ化学の世界では、大学院生の仕事としては別枠(ノー・カウント)となった。

実験的実績がないという点では競争力に全く欠ける私を東京大学理学部化学教室の助手に採用して下さった斎藤信房先生には感謝し切れないものがある。5年ぶりにもどった東大では、気体用の質量分析計を使って鉛の同位体組成を測定した。とにかく斎藤先生には文字通り迷惑のかけっ放しで、何のお返しもしていない。汗顔の至りである。

斎藤研究室に四年半世話になってから、昭和37年東大の原子核研究所の助手となった。ここでは、固体用質量分析計のイオン源を自分で試作し、これを使って、安定同位体希釈法による希土類元素の定量に成功した。しかし、私が属していた部門は共同利用へのサービスが主な業務であり、私の活動の大部分は本来の私の業務からは全く逸脱していた。周囲の人達は暖く親切にして下さったが、その限界の到来の日のことを考え始めていた。それを回避する意味をこめて、昭和41年、NASAの研究所に暫く行くことになる。原子核研究所では、現東大総長有馬朗人先生、理現化学研究所理事長小田稔先生はじめ、原子核物理学や

宇宙線物理学での錚々たる多くの学者と知り合う機会を得た。

NASA の研究所には二年半滞在した。無論、この期間は、私にとって非常に有意義な、思い出多いものであった。滞米中に一つの事故が起った。正確に言えば、それは、ハイ・ウェイで起ったはずの、しかし、起らなかった自動車事故のことである。その責任の大部分は私にあると判定されたであろう。あの状況下でその事故を免れ得た可能性は0.1パーセント以下だったと思う。彼が死ぬか、私が死ぬか、多分、両方が死ぬか、しかなかった。両方の車が衝突して、メチャメチャにつぶれた可能性が断然高く、さもなければ、彼の車が横転してメチャメチャになったに違いない。この惨事を免れ得たのは、彼の強運と私の強運と、そして、彼のアクロバットのな運転技術のなせる業としか言い様がない。思いがけぬ時にこの思い出がふと湧いて来ることがある。あの瞬時のシーンを思い出すと、今生きているだけでも有難いと思わなくては・・・といった気持になるのである。アメリカから帰国後一年して、東京理科大学の応用化学科の助教授となり、ここに四年半お世話になった。国家公務員の資格が切れることは損になり得ることは知っていたが、流れに身を任せた。ここで初めて学生から“センセイ”と言われる身分となる。質量分析計から離れることになったため、仕事の継続性などでは苦労があった。

神戸大学に地球科学科が新設され、地球化学講座の教授となった。宝塚劇場の近くの、立派な洋館を借りることになる。私は、意図的ではないが、4年半か5年で身分が変わって来たが、神戸に

7年滞在し、最長記録となる。7年目の秋に雨上りの庭石に足を滑らせ、頭蓋骨に細い亀裂が生じた。亀裂の解消には少なくとも3年はかかるという医師の予言は間違っていなかった。

昭和56年から東京大学理学部化学科の教授となり、11年在勤することになり、不倒距離(?)の記録を更新。(しかし、5年目の変動はここでも起り、理化学研究所主任を兼任することになった。)赴任当初、実験室の改造などに出費を要し、相当な赤字を作った。やがて実験装置も拡充され、充実した研究生活を学生諸君やスタッフと共に分かちることができた。一方、その間、緊張と不安と重圧に悩んだ日々もあった。私は、国外に対して鎖国政策を取っていたが、開国に踏み切った途端に外国からの留学生や研究者が急増した。スペクトル化学研究センターの設置に至るまでの苦労も感慨深いものがある。

私にとっては最長滞在期間の11年間であった。大変お世話になった東大理学部の方々から心からお礼申し上げます。特に理学部事務部の方々には在職中大変お世話になりました。

大学に入学してから今までの人生を振り返って見ると、主観的には、綱渡りの連続だったように思われます。(多くの人にとって、人生とはそういうものなのかもしれません。)師、先輩、知人、友人の励ましと支えがなかったら何本かの綱を渡り終えることはできなかったことでしょう。綱から完全に落ちかかった時には、一度ならず、一羽の鳥が何処からか飛んで来て私の命運を拾い上げてくれたようにさえ思われます。誰がその鳥を遣わされたのか、私は知る由もありません。